

紅斑性狼瘡と「不適合者」
—フラナリー・オコナーの「いい人はなかなかいない」論—

幡山 秀明

宇都宮大学教育学部研究紀要 第68号 別刷

2018年2月28日

紅斑性狼瘡と「不適合者」

—フラナリー・オコナーの「いい人はなかなかいない」論—

Systemic Lupus Erythematosus and “The Misfit”:
Flannery O’Connor’s “A Good Man Is Hard to Find”

幡山 秀明[†]
HATAYAMA Hideaki

1. 紅斑性狼瘡と自己過剰攻撃

Flannery O’Connor (1925-64) はアメリカ合衆国南部ジョージア州生まれの作家で、短編 “A Good Man Is Hard to Find” は最も有名な代表作の一つである。1955年の最初の短編集に収録されているが、Brad Goochの*Flannery: A Life of Flannery O’Connor*によると、1953年のアンソロジー *The Avon Book of Modern Writing*に既に発表されている。アメリカ南部を主な舞台にした短篇小説家として知られ、南部ゴシック作家群に分類されることもある。南部独特の雰囲気や風習、歴史や文化を通して人間内部の不条理や暴力などを描き挙げる。死後にはフラナリー・オコナー短編小説賞が設立されるなど短編作家の名手として文学史にその名を残している。

まずは、1946年 “The Geranium” が *Accent* 3月号に掲載され、1947年にアイオワ州立大学から芸術修士号を取得、最初の小説を書き始め、1948年にはニューヨークのサラトガ＝スプリングスの近くにあるヤッドと呼ばれる芸術家ための保養研修施設に入るよう招待を受け、その後はニューヨーク市からコネチカット州に引っ越し、創作活動を続ける。だが、1950年旅の途中体調が悪化して入院。1951年2月にアトランタのエモリー大学病院に転院し、紅斑性狼瘡と診断されるが、故郷に戻れる程度まで回復する。1952年初めての小説 *Wise Blood* が出版され、1955年には最初の短編集 *A Good Man Is Hard to Find and Other Stories* が出る。

16歳のときに父親を同じ紅斑性狼瘡という難病で失い、今度はオコナー本人も発病してジョージア州に戻り、故郷で創作と治療を続けることになってしまったわけで、その最中に創作されたのが「いい人はなかなかいない」であり、意識的であれ、無意識であれ、作家の様々な思いを秘めた作品であると言える。

紅斑性狼瘡とは自己免疫疾患の一種で、エリテマトーデス（全身性紅斑性狼瘡、SLE）とも呼ばれ、何かの要因により自己抗体を産生し、それによる全身性の炎症性臓器障害を起こす病名である。特定疾患で動脈硬化性心血管病による死亡率および罹病率も高い。異物を認識し排除するための役割を持つ免疫系が、自己免疫疾患により自分自身の正常な細胞や組織に対してまで過剰に反応し攻撃を加えてしまうことで症状を起こす。よく知られた膠原病も全身性自己免疫疾患である。病名中の英語 “lupus” はラテン語の狼であり、「狼に噛まれたような」と称されるSLEの皮膚症状より名づけられたそうで、狼瘡と呼ばれる所以である。

宿命のともいえる自己免疫疾患と戦ったオコナーの作品は、自己免疫疾患により異物を排除するた

[†] 宇都宮大学 教育学部 (連絡先: hatayama@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

めの免疫系が自分自身の普通の細胞や組織に対してまで過剰に反応し攻撃を加えてしまうように、彼女自身の精神やその周囲の人間、社会歴史に対しても過剰な検証や攻撃を加えずにおかない。「いい人はなかなかいない」の冷徹な暴力性もそこに起因すると考えれば、登場人物たちも広義では作家自身の生み出したオコナーの分身であり、様々な形で容赦のない攻撃が加えられていると言えないだろうか。例えば、おしゃべりで浅薄、南部レディ気取りの身勝手な「ザ・グランドマザー」（作中“the grandmother”とのみ記載されて命名されず）は、南部の歴史や文化の生み出した過去の滑稽な残像であろう。脱獄囚の「ザ・ミスフィット（不適合者）」（自らを“The Misfit”と呼び、それが通り名となる）や彼の無神論も、南部に限らず現代社会や宗教の抱える不条理や矛盾を露呈する役割を持ち、オコナーの内面に潜む彼女自身の担うべき歴史や社会、また宗教的懐疑や葛藤の一部であるに違いない。

物語冒頭には次のような巻頭言が置かれている。

道の脇に竜がいて通りかかる人々を狙っている。貪り食われることのないように気をつけなさい。魂の父の御許に向かう私たちは、竜の傍らを行かなくてはならないのだから。

—エルサレムの聖シリル

この引用文が神の恩寵へと達する過程における苦難や試練を示しているなら、グランドマザーが射殺される直前に「あんたは私の赤ちゃんじゃないか。あんた私の子供だよ！」と非情なミスフィットに手を差し出す場面に関しては宗教的な解釈も可能であろう。20代半ばで父と同じ病を発症して多分まだ4、5年のオコナーも何らかの救いを求めていただろうと思われるが、ただそれだけではあるまい。日々身体が咬まれるように蝕まれていく日々は同時に自ら自分自身の内面を、人々を、そして社会を冷酷に咬み続けていたと言ってもいいかもしれない。

2. 名前のない人物と命名された登場人物たち

ミスフィットとグランドマザーについての詳細な検証の前に、まず、その他のマイナーな役割であるにもかかわらず、命名された登場人物たちと物語の展開を大まかに説明しておく。オコナーは *Mystery and Manner* (1969) で、この短編は「6人家族がフロリダへドライブに行く途中、ミスフィットと自称する脱獄囚によって全員が殺される話」としている。そのクライマックスに向けて様々な導火線を作者は忍ばせている。旅行前日の冒頭では、新聞記事を通してミスフィットという凶悪犯が仲間たちと脱獄してフロリダ方面へ逃走中であることを予告する。グランドマザーはフロリダではなく、彼女にとって郷愁の漂うイースト・テネシーに何とかして行きたがっている。また、彼女は自動車事故の切っ掛けとなる猫 (Pitty Sing と呼ばれる) をこっそりと同行させる (脱獄犯たちと遭遇し、一家全員惨殺後にその猫はミスフィットの足元にすり寄り、まさに“pit”、つまり「罌」や「地獄」の歌)。翌朝8:45にアトランタからフロリダに向かって出発する。20分ほどで市街地を抜け、ストーン・マウンテンの岸壁の彫像を見ながら車は進む。途中レッド・サミー・バツツの経営するタワーという店に寄ってサンドウィッチを食べ、店主とその妻と世間話をする。その中で店主が「いい人はなかなかいない」と言い、良き昔の話をする。再出発後、トゥームスポローのはずれで昔訪ねた古い農園のことを思い出したグランドマザーは、そこへ寄り道をさせるために「隠し戸」の嘘をつく。興奮した子供たちに駆り立てられて未舗装の脇道へ入っていくが、思い出した屋敷はテネシー州の間違いだと気づいた拍子に隠しておいた猫が飛び出して運転するベイリーの肩に飛び乗り、弾みで車が道路下の溝に

一回転して落下する。その様を見ていた3人の脱獄囚らが一家に近づいてきて次々と容赦なく銃殺していく。脱獄囚はミスフィットの他に、灰色の帽子と青い縦縞上着のハイラム、太った若い男で赤いトレーナーのボビー・リー。だが、端役には敢えて命名するのはなぜなのか。前者は旧約聖書に言及のある紀元前900年代ツロの(現レバノンあたり)王、後者のリーは中国系よりもイギリス系か、オコナー同様にアイルランド系か。名前の由来やその発想はどこにあるのか。少なくとも現実的な名前は、逆にミスフィットやグランドマザーという抽象的名称の機能を鮮明にする。

一家に関して、グランドマザーと同居する息子のBaileyは「雑誌のスポーツ欄のオレンジの頁」を読んでいる姿で初登場する、彼の名前が“bailiff”を意味する英語圏の苗字に由来するとすれば、殺害される運命とは逆の「法の執行吏」となる。8歳のJohn WesleyとJune Starの兄と妹にも名前がある。2人とも漫画好きで我侷、怖いもの知らずでこれまたどこにでもいるような存在。息子のジョン・ウェスレーという名前は、キリスト教では有名な18世紀のイングランド国教会の司祭で、その後メソジスト運動と呼ばれる信仰覚醒運動を指導した人物と同名。この運動から生じたのがメソジスト派というプロテスタント教会であり、アメリカ合衆国で大きな勢力をもつ。因みに、プロテスタントが多い南部にあってオコナーがカトリックであったが、殺害される一家はプロテスタントという設定なのか。名前の由来が宗教家でなければ、アメリカ西部開拓時代の無法なガンマン、John Wesley Hardin (1853 - 1895、彼の父もメソジスト派の宣教師)を連想すべきか。この無法者は15歳で殺人を犯して以来、生涯に40人以上を殺したといわれ、出奔してカウボーイをしながら諸州を放浪し殺人を繰り返した。それならば、妹ジューン・スターは映画*Belle Starr* (1941年、アービング・カミングス監督)に描かれ山賊女王と呼ばれた無法者ベル・スター、本名Myra Maybelle Shirley Reed Starr、1848-89)からの命名だろうか。とすると、虐殺される子供たちに西部開拓時代の無法者を連想させるような命名をするのは何故なのか。普通の生活をする普通の人でも不法者となる可能性や危険性があることを皮肉に暗示するためか。これは、後述するミスフィット自身の語る人生にも通じる。

固有の名前のない登場人物としては、「幅の広い無邪気な顔はどことなくキャベツを思わせる」「子供たちの母親」と「赤ん坊」がいる。オコナーの周辺に限らずどこにでもいるような、一人の乳飲み子を抱え、子供を育てるだけの無気力で自立できない希薄な存在を示している。ところで、「いい人はなかなかいない」と善き人、良きアメリカを懐かしむ、街道沿いの店、タワーの店主で太めのRed Sammy Buttsにはアンクル・サムイメージがあるかも知れない。

3. 「不適合者」とは誰か？

脱獄囚ミスフィットは、何故かグランドマザーについて己の生い立ちや宗教への懐疑を語るが、現実的には普通あり得るとは思えない。つまり、作者が2人の会話を意図的に織り込んでいるわけで、それは作者自身の抱える問題を暗示していると考えられる。例えば、それは紅斑性狼瘡という「割の合わない」難病を背負った宿命、そして、カトリックとしての宗教への作者の素朴な懐疑であるかもしれない。

彼の風貌は白髪が混じりかけた銀縁眼鏡の学者風で、黒い帽子に銃を持つ。上半身は裸で、脱獄後行き当たりばったり囚人服の代わりを調達している途中であろうと思われる。グランドマザーはこの男を大昔から知っているような馴染みの顔に思えるが、誰なのか思い出せない。だが、何故旧知の人のように感じたのか。運命の出会いの予兆があったのか。また、彼の「痩せた赤い踝」が見えたところがあるが、ミスフィットは白人なのか。肌の色についての言及はない。裸と言えば、一家がドライブイ

ンに立ち寄る前に車中からズボンをはかない「黒人の子供」を目にしている。さらに、仲間のハイラムやボビー・リーの名前からは彼らの人種や氏素性は不明瞭だ。ミスフィットは人種的にフォークナーのジョー・クリスマスのような設定なのだろうか。

「いい人だってわかっている」し、「いい家の出だろう」と言うグランドマザーに対してミスフィットは、自分の両親は「世界一素晴らしい人たちだ」と白い歯を見せて微笑むが、どこまで反語的なのか。さらに、兄弟の中で除け者として育ったこと、父親殺しの罪で有罪になったことが語られる。だが、それは濡れ衣だと訴える。

連邦刑務所の主任医師は俺が親父を殺したと言ったけど、そんなのは嘘だとわかっている。親父は1919年に流行りのインフルエンザで死んだんで、俺は何もやっちゃいねえ。マウント・ホープウェル・バプティスト教会に埋葬された。行ってみりゃわかる。(130)

そして、「俺のことを自分でミスフィットと呼ぶのは、やった罪とくらった罰の帳尻が合わねえからさ」と言っていることと重ねて考えると、作者はミスフィットの父親殺しを「生きたまま埋められちゃった」冤罪という設定にしているのか。物語によくある「冥途の土産に教えてやろうか」のような展開なら、読者は彼の言葉を真に受けてもいいが、もの語りは基本的に騙りであると考えれば、やはり曖昧な言説のまま放置するしかない。ただ、スペインかぜの1918年から19年にかけての全世界的な流行(ウィキペディアの「スペインかぜ」)によると、感染者5億人、死者5,000万～1億人と爆発的に広がり、発生源はその名にもかかわらず、1918年3月頃の米国のデトロイトやサウスカロライナ州付近であるとされる)があったことや「マウント・ホープウェル・バプティスト教会」がテネシー州やサウスカロライナ州などに現在も実在することも考慮しなければならない。ちなみに、ジョージアはバプティスト派のキング牧師の故郷でもある。

「俺はしばらくゴスペルの聖歌隊にいたことがある」ミスフィットがいった。「ほとんど何でもやってきた。軍隊は陸軍にも海軍にもいったし、国内勤務も海外勤務もしたし、結婚も2回したし、葬儀屋も線路工夫もやった。畑を耕したし、竜巻に巻き込まれたこともあったし、一度人が生きたまま焼かれるのを見た」・・・「女が鞭で打たれるのを見た」男はいった。(129-30)

「いい人はなかなかない」が50年代後半から60年代の公民権運動以前の話であることからして、ミスフィットの通った教会は、奴隷制や人種隔離政策によって白人の集まる教会と黒人の集まる教会とが別々であり、そのどちらかであると考えられる。所謂、黒人教会は主に音楽スタイル(ゴスペル音楽)に代表される文化的特性は黒人の信者達によりアピールするものであろう。また、ミスフィットは父親について、聞かれもしないのに「警察ともめ事を起こしたこともない。うまく手なずけるコツを知っていた」と述べている。そして、上に引用した身の上話の中で言及するリンチの場面を考えると、これは加害者の白人側の視点による表現であるとは思えない。だが、ミスフィットの肌の色については、前述の「赤い踝」以外の説明はない。

ところで、この短編と同名のブルース(Eddie Green 作詞、1918)が存在する。1927年にBessie Smith が歌い広まった曲で、多分オコナーはつれない男を思う女心のこの曲からタイトルを取っただ

ろうと思われるので、その一部を紹介してみる。

A good man is hard to find,	(いい人はなかなかいない)
You always get the other kind,	(いつもそうでない人ばかり)
Just when you think that he is your pal	(心の人とっていても)
You look for him and find him fooling 'round some other gal,	(探してみてもほかの女といるばかり)
Then you rave, you even crave	(悶え苦しみあんたは、いっそ)
To see hem laying in his grave;	(あんな奴、死んでしまえと思う)
So if your man is nice	(じゃ、もしあんたの男がいい人ならば)
Take my advice	(あたしの言うこと聞くんだね)
And hug him in the morning	(朝に抱きしめ)
Kiss him every night,	(夜ごとのキッス)
Give him plenty lovin', treat him right	(たくさん愛して、ちゃんと扱ってあげな)
For a good man nowadays is hard to find.	(この頃、いい人はなかなかいないんだから)

祖母は、命乞いのためとはいえ、「いい人だろう?」「いい家の出なんだろう?」と、ミスフィットの良心に訴え続ける。上の歌詞のアドヴァイスのように、愛情を注いでいる様子にも感じられる。彼が聖歌隊に言及するのは、教会に行っていた善良な子供だったことを示すためだろうし、無神論であるのは「イエスだけが死人を蘇らせた」ことなど信じられないからだと言いつくをする。だが、この脱獄囚が祖母との話の最後、「男の顔がぐしゃぐしゃに歪み、目の前で今にも泣きだしそうだった」時に、「あんたは私の赤ちゃんじゃないか。あたしの子供だよ!」と手を伸ばしてミスフィットの肩に触れた瞬間、彼が「蛇にかまれたかのように飛び退り、彼女の胸を三発撃ち抜いた。それから銃を地面に落とし、眼鏡をはずして拭き始めた」。この場面を巡っては、オコナー自身が解説した表現「恩寵の働き」で説明されることが多いし、作者はその後もカトリシズムへの傾倒を深めていく。

だが、たとえ作者が「恩寵の働き」を意識的に意図したとしても、無意識の作用はいつの間にか意図するものを狂わす。難病を発病しているオコナーは、ミスフィットのように割の合わない不運に翻弄される弱者としての思いを持っていただろう。絶望的宿命の下で、オコナーは、例えば、ニーチェの言うルサンチマン（強者や支配者に対する弱者等の鬱積した憎悪や妬み）やそこから成立する愛や同情といった弱者のモラル、つまり、キリスト教道徳がその典型であるとされる奴隷道徳（強者への恐れと不信、弱者への同情、狡猾な卑下と反抗を特徴とする）のような心理構造を無意識のうちに宿していたかもしれない。また、難病の自分とそれを支えるもう一人の自分との関係が、形を変えてミスフィットとグランドマザーとのそれに投影されていないだろうか。難病という支配者や不運に対して自己憎悪が増殖し、他方、そこから救いの手を求めようとするが、差し伸べられた祖母の手は安易な命乞いと背中合わせであり、嘔みつこうとする忌むべき蛇（巻頭言の竜に通じる）のような邪悪な誘いとして拒絶してしまう。自己憐憫に駆られても容易な道が開けるはずもなく、安易なキリスト教の似非救済の声にとどめを刺す。

新約聖書はキリスト自身の復活のほか、会堂司の娘の復活（マタイによる福音書9: 18 - 26）やラザロの復活（ヨハネによる福音書11章）にも言及している。生と死、そして復活という教えは宗教の

最も基本的な概念であり、キリスト教に限らず、例えば、仏教の輪廻転生もその一つと考えられる。だが、死者の復活は寓話的に捉えたりすることがあっても、現代人は当然懐疑的である。ミスフィットのようにそれが信じられなければ、そこに救いは見いだせない。

4. 祖母と南部社会の歴史

ミスフィットがとどめを刺したグランドマザーは、多分にどこにでも遍在する自称「いい人」であろう。凡庸で無知、軽薄で単純、上品ぶった俗物で、お人よしに見えて身勝手に抜け目がない。彼女は南部のレディ気取りの装いで、思い出のテネシー州に行きたがる。大農園、『風と共に去りぬ』、ジュエックボックスの「テネシー・ワルツ」と彼女がさらに郷愁を強めるように作者は殊更にお膳立てしていく。

ドライブ旅の途中で、まず、ストーン・マウンテンの岸壁の彫像を見ながら一家を乗せた車は進む。その岸壁はアトランタ郊外にある世界最大の花崗岩の一枚岩で、周囲からの高さが251mのストーン・マウンテンの山腹には、ジェファーソン・デイヴィス、ロバート・E・リー、ストーンウォール・ジャクソンといった南北戦争時代の南軍司令官・將軍3名の世界最大のレリーフが聳え立つことでも知られている。流れる風景の中に南部の歴史のパノラマを現出させる。さらに、ズボンをはかない田舎の黒人の子どもを登場させ、ジョージアの街道沿いの風景を描写する。

アメリカ南部ジョージア州の風景、その歴史を織り込みながら、そこに住むごく普通の一家を登場させて浮かれる彼らを幸せの陰に潜む陥穽へと誘う。その原因となるのが、お屋敷の隠し戸について祖母のついた嘘であった。しかも、思い出の屋敷はジョージアではなく、テネシーにあり、グランドマザーが勘違いしてついた嘘であった。彼女の抱く懐かしの南部へのロマンティックな思いが一家破滅の原因であった。そして、グランドマザー一家だけでなく、一般の多くの人々がアメリカ南部の歴史や奴隷制度のもたらした南部社会の現状に対して認識不足であるとすれば、作者はその愚かさを容赦なく愚弄する。逃亡犯に向かって「あんたはミスフィットだ」と直接口に出してしまうような愚かさや無思慮な軽薄さ、そして、自己中心的で南部のレディ気取りの浅薄なロマンティズムを極限まで追い詰めて、そこから最後に、作者の言う「恩寵の働き」により精神の高みへと飛翔したと考えるべきなのだろうか。しかし、作者がそのつもりだったとしても読者には不満や疑念が残らないだろうか。一家が次々に殺害されて最後の一人となった状況下では、グランドマザーの最後の行為は我が身を救うための必死の命乞いであり、偽善的には見えないだろうか。例えば、もし、一家を救おうと必死にミスフィットに手を差し出し、誰かの身代わりに最初に殺害されるような設定ならどうだろうか。だが、そうなるとミスフィットとの会話が二人だけの世界になりにくい。

オコナーは自分を取り巻く人々や社会を客観的に見て、時にはユーモラスに、また冷徹に攻撃するが、同時にその攻撃はその社会や人々の一部でもある彼女自身への攻撃であるとも考えられる。グランドマザーもオコナーの心のどこかに潜む、その血を受け継いで消しても消えない同じ南部人である彼女の一部に過ぎない。

5. 「いい人」はいない？

旧約聖書の「ミカ書」は支配階級に抑圧されている人たちの苦しみに訴え、横暴な人たちの不正を厳しく糾弾する。7章の2は「神を敬う人は地に絶え、人のうちに正しい者はない。みな血を流そうと待ち伏せし、おのおの網をもってその兄弟を捕える (The good man is perished out of the earth; and there is none upright among men; they all lie in wait for blood; they hunt every man his brother

with a net. キング・ジェイムズ版)」と述べて、罪びとたちに神の裁きと滅びが近づいていることを語る。「いい人はいない」ことは、例えば、Nathaniel Hawthorneの“Young Goodman Brown”の寓話(1835)からもわかる。“Evil is the nature of mankind”という森の中で聞こえてくる50歳くらいの悪魔の姿はどこか主人公のGoodman自身にも似ていると描かれている。ピューリタニズムの強調する原罪説に基づき、グッドマンの心のどこかに悪魔が潜んでいることを暗示している。果たして「いい人」とはどのような人なのだろうか。前述のブルースでは、尽してみても結局いい男(ヒト)は去って行ってしまったと嘆いている。オコナーにとってもいい人への試練はあまりにも厳しい。

引用・参考文献

- Brinkmeyer Robert H. Jr. *The Art and Vision of Flannery O'Conner*, Louisiana State University Press, 1989.
- Cash, Jean W. *Flannery O'Conner: A Life*. Knoxville: The University of Tennessee Press, 2002.
- Michaels, J. Ramsey. *Passing by the Dragon: The Biblical Tales of Flannery O'Connor*, Cascade Books, 2013.
- Gooch, Brad. *Flannery: A Life of Flannery O'Connor*. New York: Little, Brown, 2009.
- Hawthorne, Nathaniel. “Young Goodman Brown,” *The Century Edition of the Works of Hawthorne* Vol.X, Ohio State University Press, 1974.
- O'Connor, Flannery. “A Good Man Is Hard to Find” in *The Complete Stories of Flannery O'Connor*, Farrar, Straus and Giroux, 1971. 引用はこの版による。須山静夫訳『オコナー短編集』（新潮文庫 昭和49年）を参考。
- _____. *Mystery and Manners*. Farrar, Straus and Giroux, 1969.

**Systemic Lupus Erythematosus and “The Misfit”:
Flannery O’Connor’s “A Good Man Is Hard to Find”**

HATAYAMA Hideaki